

【農は国の本なり】

第1部・越えろトヨタショック番外編1 <今こそ雇用100万人>

2009年1月11日

元日からスタートした連載企画「農は国の本なり」。第1部では不況の今こそ農業を雇用の受け皿とする日本再生の道筋を描いた。歯止めのない「派遣切り」は、経済成長の名の下に農業を切り捨ててきた戦後政治とも重なる。農業への回帰を通じ、われわれの生き方や働く意味を見つめ直すきっかけにしたい。(「農は国の本なり」取材班・秦融、寺本政司、神田要一、太田鉄弥、福田真悟)

◆元金融マン、トマトに情熱

緑線(りょうせん)の向こうに富士山がうっすらと浮かぶ。甲府盆地の南部に位置する山梨県中央市。ビニールハウスで作業する農業生産法人「サラダボウル」代表の田中進(36)は体操服にジャンパー姿。赤々と実ったトマトを両手に笑う。



金融マンを辞め、故郷で農業を始めた田中進さん。「食べた人が笑顔になれるトマトを作りたい」と語る＝山梨県中央市で

「これが今の仕事着。もうネクタイは苦しくて着けられないですね」

田中は5年前まで、名古屋で10年間のサラリーマン生活を送っていた。もともとはトマト農家の次男だが、土にまみれて働く親の姿や、子どものころ畑で手伝いするのが「嫌で仕方がなかった」という。

大学を卒業後、名古屋に本店を置く旧東海銀行(現・三菱東京UFJ銀行)に入った。扱うのは「ツチ」ではなく「カネ」。法人向け営業を担当し、専務直轄のプロジェクトチームでは億単位の融資を任されたこともある。敏腕ぶりは金融業界で広がり、5年ほどして外資系の生命保険会社にヘッドハンティングされた。

瞬時を競うグローバル金融の最前線。枕元に携帯電話は欠かせない。「夢の中で電話が鳴り『もしもし』と起きてしまうこともあった」。仕事はきつい、見返りも大きいのがこの世界。営業成績が上がれば、給与は目に見えて増え、三十前後で“千万円”の年収を手にした。周囲からは“勝ち組”と言われ、抵抗感なく受け止めた。

転機は、仕事で知り合ったベンチャー企業の姿。同年代の若い経営者が裸一貫で成功していく姿を見て、企業組織の傘で勝ち負けを競う自分が小さく思えた。「情熱を持って仕事がしたい」との気持ちが高まり、向かった先は故郷の山梨。「自然体でやりたい」と思った時、子どものころ身近だった農業が頭に浮かんだという。

2004年に実家とは別に、ゼロからサラダボウルを立ち上げた。貯金を注ぎ込み、給与は金融マン時代に比べ「微々たるもの」。それでも自然を相手にする仕事の醍醐味(だいごみ)はカネでは計れない。

自分の力を信じ、コツコツと地道な作業を積み重ねる。「上司にいい報告をしてもトマトはうまくならない。1回のエラーは響くが、ファインプレーでは取り返せない」

5年余りで、畑は9ヘクタールに広がり、栽培する野菜もトマトからキュウリ、ナス、パプリカなど約30品種に増えた。地元のスーパーや東京の小売業者に出荷し、従業員も15人に増えた。

将来の担い手を育成しようと、05年に特定非営利活動法人(NPO法人)「農業の学校」も設立した。毎年100人規模の就農希望者を受け入れ、最長1年の技術研修のほか、資金や農地確保など独立も支援する。もうからない農業はいずれ行き詰まり、結果として若者が魅力を失う。だから研修生には「お金がなくてもいい、ではだめ」と説

く。

土に触れ、サラリーマン時代に経験できない魅力を肌で感じるようになった。「会社や社会に合わせて自分を飾る必要がない。おいしい物を作ることに夢中になれる。そのシンプルなところがいい」

=文中敬称略

Copyright © The Chunichi Shimbun. All Rights Reserved.